本田清著　NHKブックス・カラー版

「白鳥のいる風景」を読んで

岩田正俊

従来の、日本の白鳥については、近代の写真撮影者アマもプロもが、被写体の好材料として白鳥を取扱い、それらの作品はそれぞれ、何冊かの写真集として出版されている。

一方、瓢湖における吉川氏父子の餌付けに始まり、各地でそれぞれの篤志家が餌付けに成功して、給餌が続けられ、これらの篤志家によってそれぞれの物語りが、数冊発刊されるに到った。

しかし白鳥を学術的良心的に取扱った著述が、いつかは発刊されねばならないが、今のところ真に学術的に、動物科学の一端として取扱っている研究者である学者は見付からない。動物学を専攻している学者或は学生としては、白鳥の生態学的研究に取組むことは一寸取付きにくい点が多々ある。

日本ではサル或はシカなどについて、学徒による生態学的ないし行動学的研究とその著述はあるが、白鳥に関しては未だ着手している人を知らない。

しかるに、白鳥に関して正しい知識が必要な時折りにもかかわらず、ややもすると給餌者あるいは世の愛鳥家の、人間本位のいわゆる擬人的想像から発言されたことが、マスコミによってまことしやかに伝えられているのが現状である。

かかる時に日本白鳥の会の事務局長の本田清氏は、日本国内否な外国のことまで取入れて、NHKブックスの1冊として、白鳥の「文化、生態、保護」の副題を付して発刊した。実に白鳥の著者として人を得たりというべきで、現代白鳥の学術的な根拠としてこれを述べることのできる人は、本田氏を措いては他にはあり得ない。

特に同氏は新潟地方において20年来、白鳥の観察を続けており、且つこれを学術的根拠に結びつけており、今日の日本における唯1人の「白鳥学」のオーソリティであるといえる。

内容については、この著書の紙数の制限により、著者のうんちくの1部しか述べられないことは遺憾であるが、追って白鳥に関し集大成のできることを信ずる。

先ず日本の白鳥は最近の渡来ばかりでなく、古くから渡来していた史実、或は各地の伝承を詳細に記してあるのは、白鳥に関する認識を新にするものである。

さらに冬鳥として遠くシベリアから渡来する白鳥が、近来北海道ばかりでなく、本州の各地にも飛来し、白鳥に関する新しい関心が自然保護の上からも高められ、手近に認識できる色豊かな白色の巨大な野鳥を見ては、今更ながら驚異の他はない。

この北海道から本州にわたって渡り（マイグレーション）のコースについて、最近に行われた標識鳥によって明かになった事実をとらえて、これを詳細に説明し学術的根拠を述べ、白鳥の自然保護の上にも重大な意義のあることを示唆し且つ教えている。

白鳥（スワン）といっても、日本に渡来するのは主にオオハクチョウとコハクチョウ（旧名ハクチョウ）で、この両種についての形態的区別、特に両種の生態学、行動学についても、最近の情報が伝えてある。

最後に白鳥を保護する上に、その環境及びそれとの関係についても、学述的根拠を述べ、単に観光上のみならず、自然保護の上からの重大性を説き、テクエコロジー（技術生態学）上からの今後の保護の方法が重要であることが説いてある。

付録的に英国の白鳥研究所を著者が観察して、単なる保護でなく、それに必要なための研究と実験に重要性があることが述べてある。

（会員、医博、動物学者）